師匠と一夜

【完】【夢男主ルート】子供たちの沈黙　後日談５

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18954267

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, 夢男主, 夢男主×霊幻, 男性妊娠, ♡喘ぎ, 射精管理

リクエストいただきました、みーくんルートの後日談の５話目です。夢男主です。（https://pictbland.net/items/detail/1951089）←にて名前を変換して夢小説として非会員でも読めます。ワンナイトしまくってる師匠が相談所のメンツにバレて泥沼化する話の後日談にあたります。師匠の子供がしゃべります。お好きな方はよろしくお付き合いください。これにておしまいとなります。見届けていただきありがとうございました。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

なお村に取り残されていた日輪の霊能力者達ですが、師匠が３人と和解した後、出れるようになってます

Table of Contents

【完】【夢男主ルート】子供たちの沈黙　後日談５

――子供達は、みんな犯人を知っていたのだ。
だけれども、犯人がハァダ様だから……この村の絶対的な守り神だったから、言う事ができなかった。
「なあ、どうしてなんだ。ハァダ様は、何故そんなことを」
訊ねても子供たちは沈黙するばかりだ。ハァダ様の祟りを恐れているのだろう。
長い長い３時間が過ぎて、家の外の草履の音が遠ざかっていく。
「……みんな今日はもう大丈夫だと思うが、念のため送っていく。みーくん、すまないがもう一仕事、頼む」
「……人使い荒いよね、センセイ」
げっそりしながらみーくんが言う。が、ＯＫとハンドサインをしてくれた。
子供達を俺とみーくんで前後に挟むように並んで、家まで送り届ける。
「あーぶくたったにえだった♪」
子供達は歌いながら歩いている。
「にえだかどうだかたべてみよう♪」
俺はそれを微笑ましく眺めながら、村の中心の屋敷に子供たちを送り届けた。

※

「みーくん、今回の事件の解決はこちら……『霊とか相談所』に任せてくれないか」
みーくんの顔が険しくなる。
「……霊幻さんを監禁してた連中のことだよね？信用できるの？」
「ああ。みんな腕は一級品だ。何、直接会うわけじゃない。ハァダ様を通して……ハァダ様を何とかしてもらうだけだ」
思わず足元を見る。

「ハァダ様ってのは……何なんだろうな」
「ああ、『排他』様のこと？」
さらっとみーくんが言う。
「言ってなかったっけ？昔は『持ち過ぎた者』が交代で巫子として侵入者をはじく『排他』様をしてたけど、実慧様がこの里でハァダ様になってからは、ずーっとやってくれてるよ」
「ま、待ってくれ。じちえ？様ってのは？？」
「マオ様の弟子の１人だよ」
「まお？？？？」
「あれ？知らなかった？マオってのは真魚、空海様の事だよ。日輪の母体の１つ、真言宗の始祖だ。その直弟子の実慧様が今もこの村を守ってくれてる。ハァダ様としてね」
はは、と笑う声が掠れる。
「まるで、今もじちえ様が生きてるみたいに言うじゃないか」
ぱちくり、とみーくんが整った顔を驚きに染めて瞬きする。
「生きてるよ」
は、と笑いが固まった。

※

即神仏、という考え方がある。
五穀を断ち、漆の茶を飲み、経を読みながら、仏となる……という壮絶な僧の最期だ。
江戸時代には疫病や飢饉に苦しむ民衆を救うべく、多くの僧が即神仏となった。
基本的には、即神仏とはミイラ、と一般的には言われている。
だが。
真言宗の中では違う。
即神仏はまだ──仏となって、生きている。
空海、つまり弘法大師がまだ生きていると公表されているように。
みーくんはこともなげに、今のハァダ様、じちえ様は『生きている』と言い放った。
当時、迫害を受けていた多くの『持ち過ぎた者』達を救うために、

じちえ様は即神仏となり、ありがたくもマオの名をいただいたこの村を守る生き仏となったのだ、と。
──およそ、１１００年以上前のことだ。
信じ難いが、それが全て真実だとするのならば。
「ハァダ様、ものすごい認知症になっているのでは……？」
笑われた。
みーくんに腹抱えて笑われた。
呼吸困難になるまで笑われて、俺は少しむくれる。
「突然、守るべき村の子を襲い始めたんだ。認知症を疑ってもおかしくないだろ」
「だって、仏に認知症って……くくくっ、ほんとそう言うとこ好きだわー、霊幻さん」
身体をくの字に折り曲げて笑うみーくんに唇を尖らせる。
「ごめんごめん、でも、そういう可能性もゼロじゃないのかもね。神様の世界はよく分からないから。ヒトの世界とはルールが違うからね……。そちらの世界に詳しいなら、日輪の美築として、一旦、霊とか相談所にこの件は預けるよ」
俺は頷く。こういう事象にはエクボが詳しい。なにせ神になりかけたやつだからな。モブにいい知恵を授けて送り届けてくれるだろう。
「じゃあ、俺は茂隆を連れてお堂に行ってくる」
「……気をつけて」
頷いてスニーカーを履く。着物にスニーカーはどうかとは思うが、転倒が怖いのでこのスタイルでいさせてもらっている。
「行こう、茂隆」
久しぶりに父親に会う茂隆は緊張した面持ちをしている。
モブ。元気にしているだろうか。
今日も念のため休校にしている。
モブと話して解決しなければ、またみーくんに結界を張ってもらって霊の子たちと夕方を耐えるしかないだろう。
何とか解決すれば良いが……。
ハァダ様のお堂の前に着いた。
昼間でも暗いお堂の奥。

仏像のように見えるハァダ様は、まだ生きているとみーくんは言う。
じっと見ていると、みじろぎしたような気がして、ゾクっとして目を逸らした。
「お父さん、かなり経路を広げながら繋ぐから、ちょっと待ってってて」
茂隆が口にすると同時に、虹色の光がお堂に溢れる。
その光はどんどん強くなり、目を開けてられないほどになる。
「──師匠」
しばらく経って、そっとモブが話しかけてくる。
「師匠、斬られたって聞きました。大丈夫ですか」
目を開けると、まだ光を纏っているモブが、……椅子に呪文の書かれた白いガムテープのようなもので拘束されていた。
「大丈夫だよ。いい医者がいるんだ。それよりモブ、ソレ……」
「ああ、僕が実体でそちらに行かないように、エクボと芹沢さんにされたんです。ちょっと意見の食い違いがあって……気にしないでください」
正直めちゃくちゃ気になったが、触れない方が良さそうなので黙っておく。
「もうお気づきかもしれませんが、子供たちを襲っているのはその村の守り神です」
「ああ」
「直接、僕が話をしてくるので、少し待ってて下さいね……あと師匠を斬った件も『お話し』してきます」
「お手柔らかにな！？」
うっすら笑って、モブはまた光の塊になる。
『…………で、……なのに、……どういう了見……』
『……、…………、……』
白い強い光と虹色の光が話し合っているのが分かる。
『いい加減にしろ！』
モブの強い口調が響いて、すうっとモブはヒトの形に戻った。
「師匠、ハァダ様、祟り神になりかけてます。出来ればちゃんと祀ってあげて欲しいんですけど、約束できそうですか？」

驚いた。そんなことになっていたのか。
「例えば？」
「お祈りの真言がめちゃくちゃなので、ちゃんとした経を唱えて欲しいそうです」
「あー……」
ヤクニタテ、ヤクニタテ、ってやつか。そりゃ嫌だわな。
「あと、ちゃんと『よそう者』に食事や着替えをさせて欲しいそうです。めっちゃ敬えとは言わないけど、最低限の行事はして欲しいとのことで」
「……なんかすまん、ってお伝え願えるか」
「一緒に聞いてるんで大丈夫ですよ。ハァダ様、本来は悪霊退治の仕事をしてたらしくて、祟り神としてバグりそうになったらその記憶のままに悪霊の子供達を襲ってしまったそうです。悪かった、ってかなりガチ反省してます」
「……ハァダ様ってかなりいい人だよな」
「照れてますね」
「村のために守り神になるくらいだから、よっぽどいい人だろうなとは思ってはいたが」
「めちゃくちゃ照れてますね。ちょっと師匠、神様とかまた怪異を誑かすのやめてくれません？」
「……そういうつもりは無かったんだが」
「とにかく、祟り神になりかけてたのを殴っ……ごほん、説得して正気に戻ってもらいました。これからはちゃんと祀って下さいね」
「肝に銘じておく」
しばしモブと見つめ合う。
くしゃ、とモブの顔が崩れた。
「師匠……僕、まだ諦めがつかないんです。師匠が誰かと結婚するなんて」
「……そうか」
「師匠、師匠、師匠、霊幻師匠──」
狂おしそうに何度もモブが俺を呼ぶのを、じっと見ている。
「師匠、愛し──」
耐えきれない、と言わんばかりに口からこぼして。

「……いや」
モブは軽く頭を振る。
「幸せになって下さい。どうか、幸せに──」
切なく涙を流しながら、祈ってくれた。
俺は衝撃を受ける。こんなに深く、俺はモブに愛されていたのか、と初めて感じられて、胸が締め付けられた。
「ごめんな、モブ。好きになってやれなくて」
苦しそうにモブは微笑う。
「謝らないで下さい。師匠にした仕打ちを思えば、謝らなくてはいけないのは僕たちなんですから」
うん。それはそう。反省しろ。
「師匠、僕たち、霊とか相談所を守って生きて行こうと思うんです。所長はずっと欠番です。霊幻師匠以外があの席に座るのは考えられない。だから、また困ったことがあったら、いつでもご依頼下さいね──」
ふわああ、と光になって消えようとするモブ。
「いやいやいや待て。

養育費の話がまだだ」

「えっ」

モブがシュンとヒトの形に戻る。
「俺への慰謝料も込みで、それぞれ月１０万払え。週明けには弁護士送るからな、ちゃんと父親の責任は果たせよ、お前ら」
「師匠……師匠ってホント……凄いですね……」
はは、と脱力してモブが笑う。
「そのかわり、月２回は子供と面会していいから。ハァダ様を通して」
「早速のコキ使いっぷりにハァダ様が涙目ですよ。師匠、それなら僕たちに認知させて欲しいんですが」
思わぬ申し出に不意をつかれる。
「まあ構わんが……いいのか？戸籍に跡が残るぞ。それにエクボは

どうするんだ」
「僕は師匠との子供がちゃんと自分の戸籍に繋がってるの嬉しいですけどね。子供まで外で作っておいて、今更結婚とか考えられませんし。……僕たち、師匠以外と添い遂げられないタチみたいですし。エクボは戸籍買った、って言ってました。財産とかその戸籍に移して、永崇が継げるようにしたみたいです」
「ふーん……」
にっ、と笑う。
「やるじゃねーか。いいぜ、認知させてやる」
ほ、とモブの肩の力が少し抜ける。
「師匠ほどじゃないですよ……じゃあ師匠、」
「またな」
ひらひらと手を振る。
「茂隆も、元気で。またね」
「お父さんも、ヒトをやめないようにね」
茂隆も、どこか嬉しそうにモブに手を振っていた。
プツリと通信が切れて。
「どうかお前らも──幸せに」
ポツリと俺は呟いた。

※

村内放送で村の人間を集める。
「……と、言うわけでだ。これからはちゃんとハァダ様を祀るようにしたいと思う。双子の右と左、やり方は知ってるよな？」
双子は顔を見合わせる。
「「失われている」」
おっと。
「美築に訊いて文献を探した方がいい」
「祈りの真言、食事や着替え、初耳」
「「子供達の家に書斎がある。そこでまず調べる」」
「それがいいな……っ！？」
ズキ、ズキと陣痛が──始まってしまった。

「「センセイ？」」
腹を押さえて顔を歪めた俺を、双子が心配そうに覗き込む。
「病院に……っ」
脂汗を流しながらそう言うと、驚いた子供達によって、念動力やらつむじ風やらをフル酷使して一瞬で病院に連れて行かれてしまった。
「蜘蛛のセンセー！！」
持ち過ぎた７オちゃんがピンポンを押しまくっている。
「……陣痛が来たのか！緊急帝王切開を行う！手術室に運んだら、みんな出てってくれ！」
「蜘蛛のセンセ大丈夫？」
「センセイ殺さないでね？」
子供達が不安そうにストレッチャーで運ばれていく俺についてくる。
「薬師瑠璃光の名にかけて、ワタシにまかせとくれぇ」
バタン、と手術室の扉が閉められた。

正直、麻酔が効いてからはものすごいスピードで手術は行われて。

あっという間に阿頼耶は産まれた。

「うん、流石ワタシ。出血もほとんど無いね。傷口も霊薬化けガマ蛙の油で塞いでるから、多分痛みも無いよぉ？」
「先生……本当にありがとう……」
メールで産まれたと芹沢にも送っておこう。
「いいってこと」
「医者がみんな先生みたいだったら、この世の人はどれだけ助かるんだろうな……」
「……」
薬師先生は遠い目をする。
「ワタシはね、元はただの人だったのだよ。ただの医者に過ぎなかった。だけれども大きな疫病が流行り、妻が倒れた時に、人以上の力を求めた。修行して、大蜘蛛様の加護を得て……」

「大蜘蛛様？」
「京都の神様だよ。ちょっとマイナーかな、病の治癒をつかさどってる。……そしてあらゆる病苦を取り除ける力を手に入れた。人としての外見を犠牲にしてね。そして人々を救おうと町に戻ったら……討伐されそうになったよ。悲しいかな、ワタシの話に耳を傾けてくれる人はいなかった。そしてこの村に逃げ込んだ。……世の中上手くいかないものだよ、センセイ」
「……そうだな」
阿頼耶に初乳を与えながらしんみりする。
「あ、そうそう、センセイ、」
こそっと耳打ちされる。
「夫婦の営みは１か月は禁止だからね。早まらないようにね」
顔が赤くなる。
「〜〜〜っ、セックス依存症の治療はいつから始めてくれるんです！？」
「授乳してる間はダメに決まってるじゃないか。それに」

「キミ、治ってない？」

そう言えば。

最後にワンナイトしたの、いつだっけ……？

※

家の中にひかれた緋毛氈に、紋付袴を着たみーくんと、白無垢を着た俺が座っている。なんで俺が白無垢なんだ、と双子に抗議したが、「ハァダ様のリクエスト」と言われてしまって渋々着ている。守り神の意見には逆らえんしな……。
「「今ここに２人は、ハァダ様のお見守りの元、夫婦となり──」」
巫女服の双子から盃を受け取り、口をつける。
みーくんも口をつけたら、参列していた子供達からわぁっと歓声が上がった。

「「お二人にはハァダ様の祝福があります」」
嬉しそうに双子が言って蓮の花びらを式場に撒く。
「あ……」
俺の身体から、無数の文字が空中に溶けて消えていく。
「「『霊幻』の苗字が変わりましたので、『霊幻』を含む名前にかけられた呪いが解けました」」
そうか。
俺は「長谷川新隆」になったのか。
身体が軽くなる気がする。キラキラ光りながら消えていく文字が、気のせいだろうが、あいつらからの祝福に見えた。
そうして皆に祝福されながら、みーくんとの結婚式は終わった。

と、なれば。

流石にみーくんにお預けを食らわせるのも限界で。

当然初夜の運びとなった。

２人して１つの布団で向かい合って正座している。
茂隆や永崇が寝ている家とは別の家を使わせてもらい、阿頼耶は薬師先生が見てくれている。
「──ふつつかものですが」
すっ、とみーくんが綺麗に座礼をしたので、慌てて俺もならう。
「ふ、ふつつかものですがっ」
頭を下げて上げると、がっとみーくんに両肩を掴まれた。
「あっ」
そのまま唇を奪われる。
「んぅっ♡んんっ、んーっ♡」
あっ♡やっぱりみーくん上手いっ♡
上顎をざりざり舌で擦られて腰が浮く。
「れーげんさん久しぶりでしょ？開発からやり直さないとね」
どこか残忍にみーくんの目が細められる。
「やり直す、って」

俺が戸惑った声を上げていると、ぴちゃ、と乳首を舐めたみーくんが、片手でローションを指にまぶして後ろに指を挿れてきた。
「あっ♡」
……一本だけ。
ゆったりと動かされる指と、乳首に与えられる鋭い刺激が焦ったい。
自分で性器を擦ろうとしたら、手をみーくんに防がれた。
「れーげんさん。また『オンナノコ』に成れるように、ちゃあんと開発してあげるからね……？」
ヤバい。
ニコニコ笑う元本職のみーくんから逃げたくなる。
「っあ♡！？」
指一本で見つけられた前立腺を押されて腰が跳ねる。
ぐっぐっぐっと何度も押されて射精感が上がってくる。
「イくっ♡イクイクイク……っ♡え！？」
小さなベルトで性器の根本を縛られて。
射精できなくされた。
出かけていた精液が腹の中でぐるぐる回る感覚がする。
「みーくん、ひどいぞ！」
「我慢して我慢して我慢して射精したらね、霊幻さん」
みーくんが耳たぶを食んでくる。
「す……っごく気持ちいいよ？やってみたくない？」
くら、とめまいがして。快楽に弱い俺が顔を出す。
「やって、みたい……♡」
「ん、いいこ」
みーくんに頭を撫でられてなんだか悔しくなる。
お返しに俺もぐしゃぐしゃとみーくんの頭を撫でた。
「わっ、へへ」
嬉しそうな顔をするみーくんに負けた気分になる。
「メスイキは好きなだけしていいよ。でもどんな感じか教えてね。ちんこ痛くなってきたら良くないからすぐ教えて」
「分かった……♡さっきから、甘イキしてる……♡ぞくん♡ぞくん♡って、きもちいーよ、みーくん……♡」

ごくりとみーくんの喉が鳴る。
「……指、増やすね」
「ん……♡」
みーくんの挿入角度が上手くて、増えたかどうか最初は分からないけれど、感覚があからさまに変わって身体がぶるっと痙攣した。
「あー……っ♡それっ♡交互にトントンするのっ、クるぅっ♡メスイキするっ♡みーくん、ぎゅってして……♡」
「……っ」
捕食者みたいな顔をしたみーくんとキスしながら、片手で抱きしめられながらゾクゾクゾクと全身を襲う快感に耐える。
「ああっ♡」
ひどい。みーくんが射精できない俺の性器を数回扱いた。
「みーくん♡おちんちんジンジンするぅっ♡イキそうでイケないっ♡」
「……チンポって言ってもらってもいい？その方が興奮するから」
「みーくんの変態……♡いいぜ♡」
思わず舌舐めずりする。
「みーくんのチンポはほったらかしでいーの……？」
ぐうっと俺の痴態に悶えるみーくん。
「いいの、今日は霊幻さんをイき狂わせるって決めてるから……」
思わず正気に戻りそうになる。
「いや決めるなそんな」
ぐり、と指をひねられて。
「ことぉっ♡みーくんこらぁっ♡」
またじわじわと身体が追い詰められていく。
「３本入ったよ」
「はぁーっ♡はぁーっ♡」
イきすぎて胸が波打ち際みたいに上下する。
「みーくん、イくぅっ……♡キて、キテるぅっ♡♡♡」
ぞわぞわと頭皮まで毛羽立つ。
「……っ広がるの、思ったより早かったね。やっぱりアナルの才能あるのかな。お待たせ、霊幻さん。霊幻さんの大好きな、みーくんのチンポだよ」

「あは♡」
コンドームを被せたみーくんのチンポに目にハートを浮かべて頬擦りしたくなる。
「みーくんのチンポぉ♡早くちょうだいぃ♡♡」
「もちろんだ、よっ！」
ずどん、と一気に大きなモノを挿れられて。
「ああああああああああっ♡♡♡♡」
いつもはトコロテンするのに、精液が出なくて代わりにチンポから電流が脳天まで走る。つま先が丸まった足が宙を蹴った。
「びりって……♡きたあっ……♡」
「霊幻さん……」
ぱたた、とみーくんの目から涙が落ちる。
「好きです……だめだな俺、こんな事で泣いちゃって」
俺は可愛いみーくんの頬を優しく撫でる。
「俺も好きだよ。両想いセックス、解放感があって気持ちいーな……っひゃん！？♡♡♡」
「がわいい……」
泣きながら腰を振るみーくんは可愛いが、チンポがぜんっぜん可愛くないっ♡
「ごりっ♡ごりっ♡って♡♡♡気持ちいいとこ、抉ってるぅっ♡♡」
くん、と喉が勝手にのけぞる。
「イっ〰〰〰〰〰〰〰♡♡♡」
かくん、と腰が抜けた。じんじんと気持ちよくて力が入らない。
「も、もうらめ、みーくんっ♡」
腰を振り続けるみーくんに気持ち良過ぎて溢れた涙を拭われる。
「じゃあ最後は、射精しておきましょうか」
しゅる、とコックリングを外されて。
「えっうそやだ、許してみーくん、これ以上気持ちいいのやだぁ……っ♡♡♡」
ごりごりごり、って内部を擦られて。
「あぁあああああぁああぁっ♡♡♡♡」
我慢して我慢して我慢して出したせーえきはめちゃくちゃ気持ちよくて。

「……っぅ、」
じわ、とみーくんがナカで出した熱い感覚に引きずられるようにホワイトアウトするようなメスイキまでして。
「みーくん♡みーくんのチンポ♡さいこぉっ♡」
びくん、びくんと快感の波が来るたびに痙攣する俺は、そのまま意識を手放した。

※

「妊娠しとるな」
みーくんと２人でぽかーんとする。
「えっでも避妊してましたよ」
「コンドームじゃろ？あれは１００％じゃないからねぇ」
みーくんと顔を見合わせる。
「どうする？」
「……俺は、産んで欲しいけど」
帝王切開で４人目か。前例が無いわけではないが……。
「俺も産みたいが、子宮の強度としてはどうです？薬師先生」
ううん、と４本の腕を組んで薬師先生が悩む。
「子宮自体の年齢は若い。呪いでつくったばっかりだからな。だが、何度も切ってるからな……ま、それはワタシが居れば大丈夫だろう」
ほっとみーくんと頷く。
「問題は、呪いが解けて子宮が消えかけていることだ」
はっとする。そうだ、俺にかけられていた呪いで作った子宮だった。
「ハァダ様の祝福で、改めて子宮を定着させてもらうといい。おめでとう、センセイ、『村の物』」
「ありがとう、薬師先生」
……ん？

双子に報告して、ハァダ様にお願いに行く。
「……なぁ、双子。ちょっと気になったんだが、俺、この村で教師

やって、祝言あげて、子供産んで……ここまでしちゃったら、何か呪術的にこの村に縛り付けられるとか、無いよな……？」

にっこりと微笑んで。

子供たちは沈黙するばかり。

※

「はっ、はっ、はっ、はっ」
黒髪の青年２人と、蜂蜜色の髪をした青年が、地図を頼りに調味市を走っている。
「いそげ、このままだとお母さんが『ハァダ様』に成ってしまう──！」
この辺りのはずだ、と地図を何度も指で辿る。
「美隆が村の子を説得してるけど、いつまで持つか……あった！」

看板を見つけて永崇が叫ぶ。
「──よう、ウチをお探しかい、おぼっちゃん」
永崇が振り返る。
「お困りですか？業界Ｎｏ．１のウチに是非ご依頼を」
阿頼耶が振り返る。
「その依頼、長谷川新隆──の弟子の、この影山茂夫が、引き受けましょう」
泣きそうになりながら茂隆が振り返る。
「母さんが──！」
ぴくりと３人の耳が動く。
「任せて」
茂夫はうっすらと笑う。

「「「一晩で解決してやる」」」

完